

Whooops!

多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

Vol.9

2015 WINTER
TAKE FREE

mini

[ウーブス!ミニ]



TAMABI REPORT
増田セバスチャン

峯村敏明
七里圭

特別レポート
多摩美まんぷく食堂

Whooops!考
東京ミッドタウンアワード

あっ!の人
かんだ♡みのり

zoom up
恋の筆触分割

TAMABI REPORT

原宿の「Kawaii」カルチャーを世界に送り出す



増田セバスチャン

(アートディレクター、アーティスト)

昨年 11 月 14 日、本学八王子キャンパスで増田セバスチャンによる特別講義が行われた。原宿発の「Kawaii」カルチャーを世界に発信したことや、きゃりーぱみゅぱみゅの美術演出でも知られているセバスチャン。特別講義は今回が 2 回目だ。初回は、きゃりーぱみゅぱみゅがデビューする前の 2010 年だった。この 4 年で活動は変化し、アートの世界に足を踏み入れたという。

原宿のファッションは 1990 年代中盤から海外でも広がりを見せる。増田セバスチャンは、原宿発である「Kawaii」カルチャーの伝道師の役割を果たしてきた。2011 年に CD デビューした「Kawaii」カルチャーのアイコン的存在、きゃりーぱみゅぱみゅの音楽と映像、海外でのライブ活動を支えてきたのは周知の通り。今やケイティ・ペリーら米国のトップスターまでが原宿のファッションを取り入れるようになった。それを世界各地のファンが真似するというような現象も起きている。

そうした状況の中でセバスチャンは次の段階に踏み出す。原宿のファッションというだけでは特定の人々しか興味を持たない。向かったのはアートの世界だった。表現をよりカラフルにしたり、普段は同居しない要素をミックスしたり。ファッショ

ンの枠を超え、広大な表現の世界に足を踏み入れた。

懸念があった。日本ではきゃりーぱみゅぱみゅのアートディレクターとして特に知られていたため、展覧会を開いてもその先入観のもとで見られるのではないかということだ。そして米国を発表の場所に選ぶ。「20 年かけて自分で構築したものが外の世界で通用するのかを試してみたかった」という。

初の個展『Colorful Rebellion -Seventh Nightmare-』をニューヨークで開いたのは昨年 2～3 月。例えばある一角では、カラフルなおもちゃなどの雑貨が壁と天井を埋め尽くし、ベッドと、デコラティブで大きなくまのぬいぐるみが置かれている。どんな意図があったのだろうか。

『「Kawaii」カルチャーは、急速に世界に広がる中で、奇抜だったらいい、カラフルだったらいい

といった表面的な部分が切り取られている」

こう感じたセバスチャンが試みたのは、自画像のように極めて「個人的」なものを作ることだった。ベッドの上で苦しんできたことや、脳からあふれ出た「Kawaii」カルチャーを自己分析した内容を表現した。作品名を英語では『Seventh Nightmare』、日本語では『七つの大罪』とし、7つのゾーンを設けることにした。しかし実際に設けたのは妄想、欲望、未来、運命、傷、現実の 6 つのゾーン。7 つ目のゾー

ンはなかった。来場客が自分で感じ、考えたことが 7 つ目になるというのだ。セバスチャンは自分が原宿のカルチャーを生み出したためにそこに逃げ込む人が増えたことを最大の罪と考え、7 つ目をこうしたそうだ。

「Kawaii」とは自分だけの小宇宙をつくることとも言う。個人的な思い入れがあれば何でも「Kawaii」。7 つ目の世界には無限の広がりがあるようだ。

= 敬称略

取材・文 = 加藤千裕
撮影 = 河野かるら

(ますだ・せばすちゃん) 1970 年生まれ。原宿 Kawaii 文化をコンテキストするアートディレクター、アーティスト。演劇と現代美術の世界で活動した後、95 年に「Sensational Kawaii」がコンセプトのショップ「6%DOKIDOK」を原宿にオープン。2009 年より原宿文化を世界に発信するワールドツアー『Harajuku Kawaii Experience』を開催。11 年にきゃりーぱみゅぱみゅの楽曲『PONPONPON』の PV 美術で世界的に注目され、14 年に初の個展『Colorful Rebellion -Seventh Nightmare-』をニューヨークで開催。映画『くるみ割り人形』で監督デビューを果たした。

なぜ、「便器」を美術館のトイレに戻したのか

峯村敏明 (美術評論家、本学名誉教授)



(みねむら・としあき) 1936年長野県生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。毎日新聞社に在職中の67～68年フランス政府給費留学生としてパリに滞在。71年に退社後、美術評論活動に専心。パリ青年ビエンナーレ国際組織委員およびサンパウロ・ビエンナーレ国際審査員を歴任。79～2006年多摩美術大学にて教鞭を執る。現在、同名誉教授、多摩美術大学美術館館長、国際美術評論家連盟日本支部会長。『平行芸術展』(1981～2005年、小原流会館)『もの派とポストもの派の展開』展(87年、西武美術館)を企画。著書に『彫刻の呼び声』『平行芸術展の80年代 1981-1991』『デ・キリコ』などがある。



講義風景 (本学八王子キャンパスにて)

昨年10月11日の午後、本学八王子キャンパスにおいて、『便器はトイレに戻す。さて、それから…』と題された、美術評論家の峯村敏明本学名誉教授による特別講義が開かれた。「便器」とはマルセル・デュシャンの『泉』を指しているようだ。しかし、それをトイレに戻すとはいったいどういうことなのか。

近年ますます「現代美術」への疑いが強くなっている、という冒頭の発言に驚いた。長くこの分野に携わってきた評論家が、なぜこのような思いに至ったのか。

それは、「現代美術」が「言語喪失状態」にあるからだという。例えば絵画や彫刻のように、美術にはそれぞれの領域に固有の素材、技法、システムがある。しかし、20世紀初頭、マルセル・デュシャンのあたりから、前時代のをひっくり返し、切り捨て、各領域に固有の素材や技法やシステム、つまり造形言語を意図的に破壊してきた。そうした動きが1世紀近く続いた結果、今日の「現代美術」は何でもありの状況になっているというのだ。

美術におけるこの特殊な状況は東日本大震災を通して如実に表れた。「苦しんでいる人たちの足しになった作品はひとつとしてない」「最大の問題は、芸術が「言語活動」であることを放棄している点にある」。共有する言語があるからこそ、発信したメッセージが相手に解釈され、伝わるのである。

問題はほかにもあるという。次々と新しいものを突き付けネタが尽きると、作家自身のプライベートをさらけ出すことが大きな要素となる。これを次のように批判した。「造形言語を欠いた芸術家が芸術以外の己をさらすのは陳腐でしかない」。

1960～70年代の文化大革命後の中国現代美術は、言語喪失状態における表現を短期間のうち

に数十倍に増幅したという。板橋区立美術館の男子トイレに設置されている牛波(ニュー・ポ)の『泉水』もそのひとつだ。デュシャンの『泉』は、便器を実用から引き剥がした作品である。対して牛波は、デュシャンの押しつけた芸術的烙印を帯びた「便器」を美術館において実用の文脈に戻した。そこには、20世紀美術の遺産を受け取りながらも先へ進もうとする批判精神がある。だが、結局この作品も造形言語を見いだす努力を怠っているという。

では、固有の言語を踏まえた現代美術はあるのか。同じくデュシャンを引用した王舒野(ワン・シュウイエ)は、絵画をその固有の言語の具である筆で描くという。均質な筆触が覆

う画面に輪郭線はない。主体と客体の境界を曖昧にすることで相互が呼吸し合うような世界を創出している。もじるのではなく、大芸術家の作品を自身の絵画的言語の中に取り込んでしまったのだ。

固有の言語を駆使する先にこそ表現の可能性を見る。そしてこう締めくくった。

「馬鹿な芸術家のごまんと出てくるのを21世紀とは思いたくない。ここでは私の願望をお伝えしました。若い皆さんに考えていただけたら有り難い」

取材・文=地引朋子
撮影=野村さくら

TAMABI REPORT



デジタルで像のレイヤーを重ねることはできる。だが、データを重ねるのではなく、紗幕を用いたアナログな方法で像を重ねていく。七里監督は、そこから生まれるスクリーンとスクリーンの間の空気感に魅力を感じるという

デジタル時代の映画に 新たな「補助線」を探す

七里圭 (映画監督)

昨年11月14日、七里圭監督の新作『To the light 2.2』が本学八王子キャンパスのメディアホールで上映された。『To the light 1.0』『To the light 2.0』と続く『To the light』シリーズは、8ミリフィルムで撮影された像についての想像と考察を促す実験映画である。「進化する映画」として再撮影を重ねて作った本作は3つのプロジェクターで投影され、鑑賞者はインスタレーション作品のような不思議な映像空間を体験した。

手足のない人形、海岸を歩く人、ガラスの破片、エスカレーターなどの映像が、左、中央、右の3カ所からスクリーンに投射される。スクリーンの前には、幅1m高さ3mほどの紗幕(しゃまく)が2枚ずつ等間隔で3列に垂らされ、かすかな風に揺れる像と像が目の中で重なりあう。中央のプロジェクターの前には、ガラスの破片がつるされ、周りの壁に反射がゆらゆらと回る。時折ガラスの光とスクリーンに映るガラスがシンクロする、ハプニング的な瞬間がある。その重なりは二度と再現されることはない。

もともとは劇映画を作っていた監督が、なぜ実験映画にカテゴライズされるような『To the light』シリーズを撮るのだろうか

か。「デジタル時代に突入していることに、いまだに乗り切れていない。今後の世界を自分の中でどうやって咀嚼(そしゃく)できるかを探っている」と上映後のトークで監督は語った。学生時代から8ミリ映画を撮っていた監督は、フィルムで撮影する最後の世代ともいえる。本格的に映画を撮り始めて10年後になると、ほとんどが最初からデジタルで撮影する世代になる。

デジタルになってどんな変化が起きたのか。例えばシーン撮影の初めに鳴らす「カチンコ」の役割。映像と音を別々に撮るのがフィルム映画の基本であり、カチンコは両者を後から同期するために極めて大切な役割を果たしていた。今でこそデー

タを切り貼りして編集すれば像と音が一致しないことはないが、フィルムではカチンコを打つ映像と鳴る音が合わないとズレが生じてしまう。一方、カチンコの音は撮影時に特有の緊張感をもたらし、張りのある演技を誘い出してもいた。

デジタルは映画を作ること、見せることを簡単にした。2、3年前と比べても映画の製作本数は2倍近くになり、専門家ですら見切れない。短期的に消費され、目にも留まらぬ早さで消えていく映画も多い。さらにデジタル化された映画はカーナビの画面、スマートフォン、街の

壁など様々な場所に偏在するようになった。データになった映画には「これ(フィルム)です」と指すべき物体もない。

「プロジェクターを使って映画館で上映するスタイルがもうデジタルに合っていないのかもしれない」。こう言いながらも監督はアナログ的な微妙なズレや重なりにも価値を見いだす。デジタルとアナログの間の実験的な試みは、表現を広げるための新たな「補助線」になるのではないか。映画の新しいあり方を問う時代が来ている。

取材・文=韓松鈴
撮影=豊嶋希沙



(しちり・けい) 1967年生まれ。高校時代の8ミリフィルムが第8回びあフィルムフェスティバルに入選。早稲田大学に進学しシネマ研究会に所属、先輩の西山洋市、高橋洋、井川耕一郎の手伝いをするうちに、映画の現場で働き始める。主な作品に『のんきな姉さん』『眠り姫』『ホットントットエブロン - スケッチ』『Aspen』(クラムボンPV)『マリッジリング』などがある。最近のプロジェクトでは、映画を音から作り始める実験的製作「映画としての音楽 music comme le Cinema」を行っている。



美術家のコヤヒロカさんによってペイントされたガラスの破片が中央のプロジェクターの前につるされ、反射がホールの周りを回る

レイアウト=宮坂映紀 (P2~4)

特別
レポート

多摩美まんぷく食堂

東学食堂



多摩美大の八王子キャンパスには2つの食堂があります。300席の大きくてきれいな「東学食堂」に、小さいながらも長年愛され続けてきた「イイオ食堂」。あなたは東学派？ それともイイオ派ですか？ しかしいつもは行っていないほうの食堂にも、ちょっとした情報を携えて足を向ければ、意外な味や愛情を発見できるかもしれません。さて、今日はどちらで何を食べましょうか？

温玉とオニオンフライがのった名物の「Aカレー」(370円)

100種超の日替りメニュー

「東学食堂のカレーは、毎日5時間以上煮込んでいます。そうすることで具材が柔らかくなり、たくさんの食材の味が調和して美味しさが増します。煮崩れないように豚バラ肉を使っているのもポイントです。レシピはチーフが変わるたびに更新しており、今のカレーは6年目ですね」

チーフを務めている渡辺陽介さんは、東学食堂で腕をふるい始めて6年目。メニューのほとんどを考えているとい

う。日本人が大好きなカレーはもちろん定番だが、どこにでもあるメニューゆえ、東学ならではの味にこだわっている。

一口食べて深みを感じるのは、10種類ものスパイスがブレンドされているからだろう。「Aカレー」には温玉が乗っており、混ぜると味がまろやかに。学生が喜ぶだろうと昨年始めたのは「気まぐれカレー」。メキシカンカレーやドライカレーはたまたま…。

食堂まで足を運ばないと分からない日替わりの内容だ。

値段は高くてもワンコイン500円以内。にもかかわらず毎日約35種類ものメニューが用意されている。しかも、日替わりメニューは、天津飯やチゲ鍋などなんと100種類以上。同じメニューは年に2～3回しか食べられない計算になるが、人気があるものは3週間程度のローテーションで出しているという。やっぱりそうでなくては！ ちなみ

に、人気が高いのはオムライス系だそうだ。

「学生さんが喜ぶメニューは何だろうと毎日考えているので、ちょっとした意見でもいただければ嬉しいです。リクエストがあればどんどん応えますよ」

小腹が空いたときのために鳥の唐揚げやたこ焼き、ミニポテもメニューにある。忙しい学生生活の合間、息抜きをしたいときに利用するのもよさそうだ。



座席数が多いだけでなく、天井が高く開放感がある



東学食堂外観

東学食堂(とうがくしょくどう)
デザイン棟前に位置する。同建物内に売店、画材店も。月～金＝11:00～19:00 土＝11:00～17:00 ※集中講義・補講期間、長期休暇中は変更あり。

イイオ食堂



野菜たっぷりの「ラーメン(塩味)」(360円)

昔ながらの愛され食堂

「4年間食べても健康でいられるように、元気に卒業できるようにとの思いで毎日料理を作っています」

こう語るのは、1972年に開業したイイオ食堂店主の丹羽弘明さんである。昔懐かしいイメージの小さな食堂には、作品制作中とおぼしきつなぎ姿の学生たちが毎日あふれている。

多くの学生が注文するラーメンの出汁は、8割が野菜から取ったものという。とんこ

つなど油分が多い出汁が人気のラーメンの世界で、「学生を健康に」という丹羽さんの心意気とやさしさがよく分かる。だからなのか、味の特徴はコクがありながらもやさしさを持っていること。多摩美生は、心して食べるべし！

一方、麺は60種類以上常備しており、担々麺、ざるラーメンなど種類に合わせて変えているそうだ。

多様さに目を見張るラーメンの中で意外と好評なのが、

14時以降限定で販売しているシンプルラーメンだ。値段は220円。唐揚げやごはんを加えてもワンコイン以内で収まるので、目にもお腹にもちょっと豪華な食事が、学生

の財布でも可能になる。

とにかく徹底して学生の健康を考えているという丹羽さん。若者向けのメシといえば定番の揚げ物は、むしろ控えることをルールにしているというから驚く。肉や魚もバランスよく食べてもらうのが基本だ。

そんなイイオ食堂は、卒業生にも愛されている。証しの一つが、食堂の随所に掲げられているロゴマークや丹羽さんの似顔絵。すべて卒業生が制作して食堂に贈ったものという。

「美大生ならではのプレゼントですね。実は卒業生の会にも呼ばれることがあって、先日出席してきました」

イイオ食堂への愛は丹羽さんへの愛でもあったようだ。



丹羽さんの似顔絵とイイオ食堂のロゴは卒業生が制作し、贈ったものという



こぢんまりした店内には多摩美の学生を文字通り「育てた」歴史が詰まっている

イイオ食堂 (いおしょくどう)
絵画棟に位置する。売店併設。
月～金=9:00～16:00 土=9:00～15:00 ※集中講義・補講期間、長期休暇中は変更あり。

芸学生に聞いてみました！ イチオシメニュー

本学芸術学科の学生15人に、イチオシのメニューを聞いてみました。その中から東学、イイオそれぞれのベスト3をピックアップ（価格は2014年12月現在）。今日のランチの参考になりますように！



東学食堂のイチオシ



からあげ

(1ヶ50円)

「カラッと揚がっていて値段も手頃だし
小腹が減ったときにちょうどいいです」

イイオ食堂のイチオシ



ビーフシチュー

(320円)

「家ではあまり作れないので学
食で食べられるのは嬉しい！」

目替わり ミニ丼

(280円)



「安いうえにみそ汁もついてきてとてもお得感があります」

「お肉と野菜がたっぷりです食べ応えがあります」

ネギトロ丼

(500円)



「この値段で魚介類が食べられるのはとて
も嬉しいです。ボリュームもばっちり！」



つくねうどん

(340円)

「つくねがジューシーで満足感が◎。メニュー
にあればいつも注文してしまいます！」



イイオカレー

(370円)

「イイオといえばやっぱりカ
レー！ 辛いものが苦手な人も
食べやすい優しいカレーです」
「ごろごろ野菜が入っていて食べ
応え十分」

※お答えいただいた芸学生の皆さん、ご協力ありがとうございました。

取材=大村良輔、河野かるら、中村昂史 文・撮影・イラスト=河野かるら レイアウト=中村愛

芸術 × 科学

×

||

∞

多摩美術大学 芸術学科
〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

<http://www.tamabi.ac.jp/geigaku/>

芸術学科に関するお問い合わせ▼

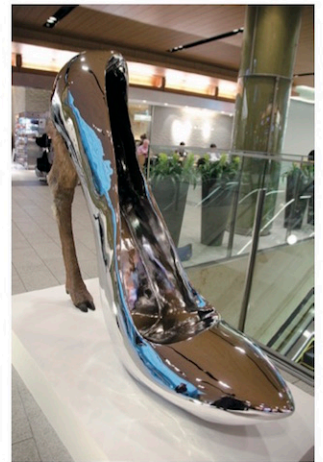
TEL:042-679-5627 FAX:042-679-5649

Email:geigaku@tamabi.ac.jp

Whoops!考



写真はアーティスト山田弘幸さんの作品『欲玉』の前で行われる最終審査(非公開)の様子。2014年10月6日、東京ミッドタウンのオープンスペースで完成作品の審査が行われた。この最終審査の前に行われる2次審査は一般公開されており、アワードの特徴にもなっている



銀色に輝く巨大なハイヒールは、『The other』と題された住田衣里さんの作品。ヒールの部分が獣の足になっている。都会で生きるスタイリッシュさと人間のもつ動物的な本能の2つの面を表現したという。この作品は Tokyo Midtown DESIGN TOUCH でオーディエンス賞に輝いた

企業によるパトロネージュのあり方とは

「Tokyo Midtown Award 2014」アートコンペを取材して

都営地下鉄大江戸線「六本木駅」8番出口から上りのエスカレーターに乗ると、東京ミッドタウンプラザ B1F に出る。そこからミッドタウン・タワーへと向かう道の途中に、突如としてコンクリートのブロック塀が現れる。「住宅街にあるようなブロック塀がなぜこんなところにあるのだろう」と違和感を覚えながらも、近づいてみると芸術作品だと分かる。

それは、長い年月を耐えてきたブロック塀を金属で精巧に表現した作品だった。塀の周りにはトンボやアリなどの小さな生き物がいて、どこかに懐かしさを感じる。実はこの作品、虫や草花も含め、すべてが金属でできている。『群雄割拠』と題されたこの彫刻の作者は、金属造形家の原田武さん。「Tokyo Midtown Award 2014」アートコンペのグランプリに輝いた作品だ。美術館ではなく、六本木という大都会で日常的に往来がある場所にあるからこそ、人々の心に訴えかけ、その底から何か

を呼び覚ます。そんな作品だった。

昨年で7回目を迎えた「Tokyo Midtown Award」は、次世代を担うアーティストとデザイナーの発掘と応援を目的に2008年に始まった。他のアートコンペと違うのは、美術館のような閉じた空間ではなく、パブリックスペースである通路に作品が展示されること。そして受賞者への賞金のほかにファイナリスト6人に、それぞれ制作費として100万円の補助が出ることである。

加えて、受賞者に贈られるトロフィーもよくあるゴルフなどのトロフィーとはまったく違う。毎年、美術家やデザイナーがその年用にデザインする貴重な「作品」だ。今年のデザインを担当したのは、審査員でもある彫刻家の土屋公雄さん。土屋さんが選んだ素材はイタリア産の大理石、ピアンコカラーラ。「若い作家のこれからが満ちていくように」という思いから、満月に近い12番目の月を表現したトロフィーが完成した。

展示環境や最終審査に残ったファイナリストへの制作金補助からトロフィーにいたるまでの様々なことには、発掘されるべき若手クリエイターたちに、できるだけ実のある支援をしようという思いが感じられる。主催の東京ミッドタウンマネジメントは、三井不動産の系列会社。企業がアートを、ここまで精力的に支援できるのはなぜだろうか。

「このアワードの目的は、六本木という街のブランディングにあります。10年はもちろん、20年は続けていくつもりです」と話すのは、東京ミッドタウンマネジメント代表取締役社長の中村康浩さん。20年続ければ、世界で活躍する作家が出てくるかもしれない。作家の経歴に本アワードの名前が入る。それが「アートとデザインの街東京ミッドタウン」というブランディングにつながるというわけだ。

純粋に儲かった結果として社会還元のために行う支援や寄付は、儲からなくなると終わってしまう。むしろ目的を明確にすれば、支援は



金属造形家の原田武さんの作品『群雄割拠』。作品のコンセプトだけではなく、「なぜその素材を使ったのか」「なぜその展示方法をとったのか」といった様々な問いが作家たちに投げかけられる

持続する。環境保護にしる企業メセナにしる、「持続」は時代の大きな課題である。「10回くらいではまだまだです。30年後、受賞者の中から審査員になるようなクリエイターが出てくるようになればとても嬉しい」と話す中村さんの笑顔が印象に残った。

取材・文=韓松鈴
撮影=ミヤザワカナ
レイアウト=並木結花

あっ!のん

アイドル戦国時代と呼ばれる現代では、たくさんのアイドルが流行っては廃れていく。そんな中で、「流行らないこと」を探して生きるアイドル、かんだ♡みのりさんにお話を聞いた。



取材は全て筆談で行われた

アイドル かんだ♡みのり

白百合学園小・中・高等学校卒業。東京芸術大学美術学部先端芸術表現科中退。愛称みのりん♡ピンクとおじさんとお洋服と甘いものが大好き。本物のニューウェーブ界のアイドルはわたし。職業みのりん♡お仕事内容は、毎日名曲喫茶でトラウマ手帳をつけること、自撮りブログの更新、一人プリクラ、大好きな人へのラブ活、にやど、にやど...♡ライブするのが、好き!神様は戸川の純ちゃん、心の旦那は岡村靖幸さん、敬愛するのは平沢進師匠、永遠の憧れは、松田聖子様。猫耳ぶにろり少女、みのりんだゆ!!にやあ♡お嬢様系お人形ユニットピンクに死ね!!♡前衛的演劇集団 改造への躍動♡馬骨アイドルユニット OH MAMA!♡DJ みのりん♡



「アイドルなんてみんな死ね」作品イメージ。10 日間の展示を予定していたが、暴漢にあい3日で終了した(写真提供=かんだ♡みのり)

「誰も見たことがないアイドル」に

東京の原宿などのギャラリースペース、プリクラ機、薄暗い地下のライブハウス…。様々な場所でパフォーマンスを行っているのは、ニューウェーブ・アイドルのかんだ♡みのりさん。全ての作品は彼女がいることで成り立っている。「人生や生活そのものが作品。でも、作品という言い方は好きじゃない。作っているって意識はないんです」と話す。

東京芸術大学先端芸術表現科に在籍していたが、昨年中退した。もともと進学した理由は「何をしてもいい所と聞いた」から。「特にアートが好きでもないし興味もない。大学時代の友達がアートをしているのは純粋に応援するけど、私がしているのはアートではありません。芸大はやめてよかった」。

2013年、『美術手帖』誌が渋谷PARCOで開いたアートコンペ「シブカル杯」での展示を目にした人もいだろう。美少女のイラストや

ファンシーグッズで彩られたスペースに、ピンク色のセーラー服を着たみのりさんがたたずむ。お話ししたり、一緒に写真を撮ったり…。観客は様々な形で、しばし彼女との「お遊び」を楽しむ。とても可愛らしく、女の子らしさ満点だが、作品名は『アイドルなんてみんな死ね』。「今はニューウェーブと呼ばれるアイドルが多いけど、みんな流行ってしまっている。流行ったらもうサブカルチャーで、ニューウェーブではないと思う。だからサブカルチャーの中心のような渋谷PARCOで、『うそつきな偽善者アイドルは死ね!』って言いたかった。何に關してもうそつきが嫌いなんです。偽善ばかりのアイドルも、思ってもいないことをあたかも自分の表現のように言うアーティストも好きじゃない」。一見甘い世界に見えたのは、流行りに価値を見いださない彼女の「宣戦布告」だったのだ。「でも、あんなつまらない流行りのイベント

には二度と出ません。私がやろうとするのは誰もやっていないこと。流行ったら終わり。すぐにやめます。ただ、私がやっていることは素晴らしいはずだから、多くの人に見てほしい」。

そんな彼女は、失声症やノイローゼと戦いながら生きている。「作品なんて作りたくないけど、そうでもしなきゃ生きていられない。こんな

人生は望んでなかった。ずっとなりたいと思っているのは、普通の可愛いお嫁さんです。そんなひとりの女の子の、全力の人生に勝るような真実の表現など、はたして存在するのだろうか。彼女の世界に足を踏み入れたが最後、もう半歩可能なアートには戻れなくなるかもしれない。

取材・文・撮影=今井楓



2014年の京都国際芸術祭にて発表されたインスタレーション『みのプリ』。ぬいぐるみに彩られたプリクラ機の中で、参加者はみのりさんと撮影ができる(写真提供=よしもとクリエイティブエージェンシー)

レイアウト=古澤旅人

zoom up

— モネやゴッホとデートしてみませんか？

デッサンについてエドゥアール・マネやベルト・モリゾと語りあったり、エドガー・ドガとバレエを見に行ったり、フィンセント・ファン・ゴッホと浮世絵の模写をしたり…。印象派周辺の有名な画家たちが登場するのは、何とパソコンで楽しむ女性向けの恋愛シミュレーションゲームだった。その名も『恋の筆触分割』（通称『恋筆』）。ただ仮想恋愛を楽しむのではなく、美術史への理解を深めることができる。制作したのは本学の5人の学生。開発秘話を聞いた。



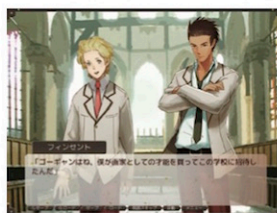
恋愛シミュレーションゲーム 『恋の筆触分割』

(こいのひっしょくぶんかつ) 2012年に活動を始めた多摩美術大学の学部生5人による自主制作女性向け恋愛アドベンチャーゲーム。同年11月に初体験版を、13年11月に製品版を発売。14年に学生作家の展覧会『たつまきエメラルド』でゲームの世界観を再現した展示、ムービーの上映を行った。メンバーはシナリオのサクライトミ、キャラクターデザインのM.K 背景のサイコ、スク립ト・ウェブデザインのにしあき、サウンドデザインのさえくさの5人。販売情報は以下のサイトに掲載されている。

<http://koihude.web.fc2.com/event.html>



取材に応える『恋筆』制作メンバー。2年生の頃活動を始めたメンバーの全員が、この3月に卒業する予定だという。『恋筆』は彼らが「学生生活のほとんどをかけて作った作品」という



ゴッホとゴーギャンが登場する本編スクリーンショットより

「美大に入って、美術史の勉強がとて面白かった。その面白さを何かのエンタメで伝えられないか…と考えたのがゲームを作り始めたきっかけ」と語るのは、シナリオを担当するサクライトミさん。『恋筆』は多摩美術大学絵画学科日本画専攻の3人と情報デザイン学科2人の有志の学生が作った。ただし、乙女ゲームを実際にプレイしたことがあるのは、メンバーの中に1人しかいなかったという。それでもゲームを作ることになったのはなぜだったのか。

主人公はフリーターをしながら美術学校を目指す19歳の女の子。ある日突然異世界の美術学校に迷い込

んでしまう。ゴッホ、ゴーギャン、ルノワールにマネといった巨匠画家たちがクラスメートに。彼らと交流しながら元の世界に帰る方法を探す…というのがゲームの流れだ。神話や歴史を描く伝統にあらがって風景や人物を映す光の変化を画面に描きとめた19世紀後半フランスの芸術運動「印象派」が舞台。それまでの様式に疑問を抱き、新しい表現を求めた姿勢は現代にも通じるという考えから、「印象派」を舞台に選んだという。タイトルにある「筆触分割」は、明るい光を表現するために絵の具を混ぜずに使う、印象派の代表的な技法の名前だ。

キラキラした派手なアニメーションの

ような絵柄が多い乙女ゲーム。その中でも『恋筆』は絵の具で塗ったような温かみのあるイラストで、乙女ゲームをプレイしたことがない人でも手に取りやすい。制作チームが最もこだわったのが「Mac対応」という部分。実は恋愛シミュレーションをはじめとしたPCゲームの多くは、Windowsでしか遊べないという。「美大生にはMacユーザーが多いので、彼らがプレイできるように」という思いから、海外のゲーム開発用のプログラミングを研究して「Mac・Windows対応」を実現した。彼らは、美術史を楽しみながら学んでもらおうと思い、ゲームを作ったのだ。

ゴーギャンが株式仲買人だったり、マネがサロンへの反発を抱いていたりと『恋筆』の設定は「史実」に基づいている。1人のキャラクターと恋に落ちるだけでも、その作家の人生や印象派についての理解を深めることができる。18通りあるゲームのエンディングの中で、悲劇の作家とどのような結末を迎えるかはプレイする人次第。巨匠たちと恋の駆け引きをしながら、19世紀の美術に思いを馳せるのはいかがだろうか。

取材・文=韓松鈴
撮影=萬代とし栄
レイアウト=古澤旅人

Whoops! mini [ウープス！ ミニ] Vol.9 2015 WINTER

- ◎編集長=小川敦生
- ◎編集=荒井洋平、今井楓、大村良輔、荻原崇太郎、加藤千裕、韓松鈴、河野からら、小林真弓、地引朋子、清水千里、菅原海人、田草川健太、中村昂史、林勇太、疋田健一郎、秀島朱美、萬代とし栄
- ◎誌面デザイン=梅美沙 (アートディレクター)、大村良輔、中村愛、並木結花、古澤旅人、宮坂咲紀
- ◎撮影=今井楓、河野からら、豊嶋希沙、野村さくら、萬代とし栄
- ◎表紙写真=七里圭「To the light 2.2」より (撮影=豊嶋希沙)
- ◎発行=多摩美術大学芸術学部芸術学科フィールドワーク設計ゼミ 〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723
- ◎印刷=多摩美術大学芸術学科研究室
- ◎問い合わせ先=whoops.tamabi@gmail.com
- ◎Twitter=@aogawageige77
- ◎フィールドワーク設計ゼミ Website=QRコード
- 掲載記事の無断転載を禁じます



Whoops! について

今回は本誌を手に入れていただきありがとうございます。タイトル「Whoops!」とは、「あっ！」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい、そんな思いを込めて刊行いたしました。お読みいただくうちに小さな「あっ！」が生まれてくれたら幸いです。

祈りの道へ

四国霊場

開創

1200年記念

— 四国遍路と土佐のほとけ —

2014 11月22日(土)

↓ 2015 1月18日(日)

多摩美術大学美術館

主催：多摩美術大学美術館

共催：高知県立埋蔵文化財センター(公益財団法人 高知県文化財団)

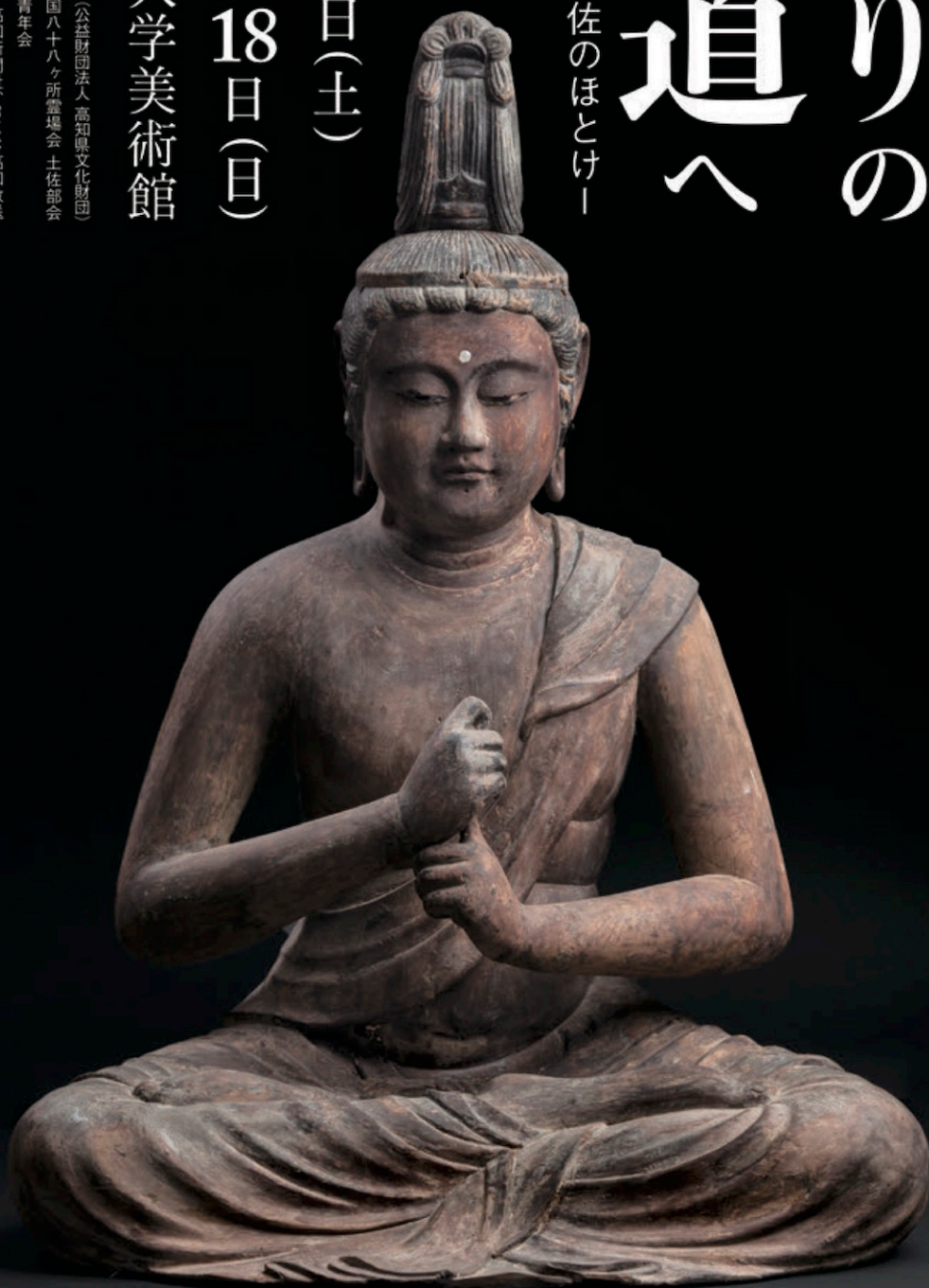
後援：四国八十八ヶ所霊場会、四国八十八ヶ所霊場会 土佐部会

高知県仏教会、高知県仏教青年会

高知県、高知県教育委員会、高知新聞社、RKC高知放送

協力：高知県立歴史民俗資料館(公益財団法人 高知県文化財団)

おへんろ交流サロン



大日如来坐像(須崎市・哲野大日堂鎌倉時代) 撮影：大塚孝雄



多摩美術大学美術館

所在 〒206-0033 東京都多摩市落合 1-33-1

TEL：042-357-1251 / FAX：042-357-1252

E-MAIL：museum@tamabi.ac.jp

http://www.tamabi.ac.jp/museum/

開館 10：00～18：00 (入館は17：30まで)

休館日 毎週火曜日(祝日にあたる場合は翌日)

展示替え等臨時休館日、および年末年始(12/28～1/5)

入館料 一般 300円(200円) / 大・高校生 200円(100円)

※中学生以下、障害者および同伴者は無料 ※()は20名以上の団体料金

多摩美術大学の学生は無料

交通 京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩7分

